

（著 者）

Christopher Pallis, MD, FRCP

（Reader emeritus, Royal Postgraduate Medical School, London）

（訳 者）

植村研一（浜松医科大学教授・脳神経外科学）

中谷比呂樹（厚生省医務局医事課）

西川正郎（厚生省医務局医事課）

（監 修）

厚生省医務局医事課

人間の死と脳幹死

竹内一夫（杏林大学教授・脳神経外科）

おそまきながら最近わが国でも脳死に対する関心が高まっているが、論議に先立ってまず十分な理解が必要である。その意味で本書は英国の医師に向けて書かれた脳死の基礎的な解説（ABC）であり、1980年におきた“不幸な出来事”，すなわちBBC放送のパノラマ事件を契機として Brit. Med. J. に掲載された記事が基本となっている。したがってわが国でもこの問題に興味のある医師はもちろん、一般の医師も常識としてこの程度の知識をもっていなければならない時期になっていると言える。

そもそも脳死は「生きた体に死んだ脳」と表現されるが、一方では「脈の触れる死体」とも表現される。これは未だに論議の絶えない脳死を“生”とみるか“死”とみるかの観点の相違を示すものであるが、脳死そのものの病態はただ一つの筈である。ただ、広く一般的に用いられている「全脳髄の不可逆的な機能停止」なる定義と、本書の表題になっている脳幹死（brain stem death）を脳死とする英国流の考え方があり、両者のいずれをとるかは未だ議論の余地があるところである。もちろん本書では後者の考え方にもとづ

き、脳死の判定は脳幹機能の不可逆的喪失を証明することであり、その妥当性についても詳しく説明されている。すなわち脳でも心臓でも全細胞の死に先立って有機的な機能を果さなくなれば、それぞれの臓器の死と考えねばならないことが繰返し強調されている。この前提が脳死（脳幹死）でも時にはなお脳波活動や脳循環機能が残存するような事実の説明には不可欠で、全脳死（brain death）あるいは大脳死（cerebral death）とのくい違いによる混乱を避けることもできる。

本書では脳幹死の判定にあたっての実際的な手順も詳細に記述され、臨床における手引として利用できる。とくに脳幹反射や痛覚の検査法はわかり易く、また無呼吸の検査法も明確に述べており、実地の判定にあたり迷うことがない。さらに誤診の危険性とその対策、そして患者の保護策についてもこまかい記載があり、“生者埋葬”の危険を避ける努力が払われている。いずれにしても脳幹死に限定することで、理解も容易となり、判定もより確実となる。

とくに客観性に富む平坦脳波の評価にも、混乱を招くおそれがない。ちなみに本書では「脳波所見は脳波の

価値を十分理解している人のみが利用できるものである」と明快に述べている。

蘇生医学や移植外科の進歩に伴って、長い間人類にとって何ら問題とされなかった“死の概念”に、修正の必要が生じたことは周知の通りである。そして一部では欧米諸国に比べ、わが国における脳死への対応の遅れが指摘されている。しかし英国でもやはりわが国で経験されるような誤解や偏見がなかったわけではない。ただ英国の判定基準の正確なことも、妥当なことも本書によって十分説明されている。このような医学界の姿勢がその国の社会を啓蒙し、与論をリードする為には是非必要であることが痛感される。

訳者らは脳死をもっとも経験する機会の多い脳神経外科医で語学力には定評のある植村教授と、厚生行政にたずさわる2氏である。したがっていくつかの直訳的な箇所やミス・プリントを除き、さすがに全般的に流暢に邦訳されている。また巻頭の解説も、巻末の付録も大変有用である。しかも原文にしたがって全篇を通じて重要なポイントの要約が表示され、また適切な挿画が示されている。これらによって「脳死の判定はすべての医師が正しくできる」という私の主張が、わが国でも実現するために、本書は欠くべからざるガイド・ブックたる資格を十分にそなえているものと信ずる。ただ本書に盛込まれた“死の哲学”が、そのままわが国の社会にとり入れられるかどうかはまた別の問題であろう。

（B 5，頁88，図18，写真5，カット34，¥2,900，〒250，1984，医学書院 刊）